

岐阜県における女子中等教育事情の一考察

西脇 明美 (Akemi NISHIWAKI)

【はじめに】

ある研究調査に当たっていた折、岐阜新聞、明治28年4月28日付けの記事が目にとまった。その内容は、岐阜県在住の子女4名が京都の女学校に入学したこと、そして、その新入生を、同郷の卒業生、青木種緒が京都に残って世話をしているということであった。単なる人情的美談なれば記事にする程のことでもないのにとその扱いに疑問を抱いたとき、ふと明治のこの期における女子中等教育の事情が絡んでいるのではないかとの思いが浮かんだ。

明治初期においては、まだ学制の整備が不十分で、特に女子と限定した中等教育の規定は存在しなかった。従って、先進的に開校した女学校は、男子の中等教育に準じる暗黙の了解事項として出発していた。このような時期、岐阜県の子女が遙か京都で学ぶのは何らかの理由があろう。そこでこの記事を手掛かりに調査を拡げ、この期における岐阜県の女子中等教育の実情と女子生徒の動向について究明することとした。

【1】女学校不在時代

明治5(1872)年8月頒布の「学制」を受け、岐阜県内では同年11月の大垣町小学義校(現、興文小)設立認可を皮切りに、続々と小学校が開設され、同7年末には五百余校となった。

一方、中等教育にも力が注がれ、遷喬(後の岐阜中)、斐太、大垣、東濃など男子中学校が開設され、同12年10月には、岐阜県師範学校の附属として女子師範学校と普通女学校の開業が通達され生徒募集を始めた。幾人の応募があったか不明であるが、翌11月には女子師範生15名、普通女学生18名が入学している。(戸部芳文『岐阜県教育発達史』)

当時、公立女学校が全国にわずか6校にすぎなかったことからみれば、きわめて先駆的なことであったといえよう。(深谷昌志『良妻賢母主義の教育』)

ところが同18年、女学校は華陽学校(岐阜県師範学校と岐阜中学校が合併改称)に吸収されて「華陽学校女学部」と改称。さらに翌年、女学部内普通女学科が廃止され、ついに同20年には女子師範学科も廃止されてしまった。残念にも全国に先駆けた岐阜県内の女子中等教育の火は、10年を待たずして消えてしまったのである。

女学部がなぜ廃止されたのか、同18年の通常県会会議日誌によれば、「女学校は岐阜地方少数の有志者の女子のみに存在する感がある」「民力疲弊時の女学校への地方税支出は農学校廃止の均衡から考えても不適當」「男子教育に比べれば不急」などとある。(『岐阜県議会史1』)

かくして女学校は、高等女学校令を柱とする女子教育振興策により、再設をみる同33年まで県内不在の時代を迎えた。さてこの13年間、向学心に燃える12、3歳の子女たちはどのように対処していったのであろうか。

当時の消息を知る資料として、同 32 年の『通常県会会議日誌』がある。それによると、「東京その他全てのところを調べましたら未だありまじょうが、京都の高等女学校に岐阜県から行っておる者が 23 名、名古屋に 14 名、金城、清流、合して 10 名、彼是 50 名近い者、実に他の遠方の土地まで踏出して修業して居る」と記されている。これは女学校の設置を訴える峯視学官の発言である。女学校不在の事態にも断念することなく、勉学にいそしむ女子がいたのである。この資料を手掛かりとしてさらに調べてみると、京都の女学校とは、わが国初の女学校として明治 5 年 4 月に開設された「新英学校及び女紅場（後の京都府女学校、現、鴨沂高等学校）」のことで、この女学校で学んだ岐阜県出身者は明治 10 年から同 40 年までに総数約 60 名を数えた。

次に東京の学校の数校のうち、岐阜県内の私立学校創立者の幾人かを輩出した東京裁縫女学校（現、東京家政大学）には総数約 36 名。名古屋の金城女学校には 5 名（明治時代のみ）などを確認することができた。

ともあれ、近代化への槌音高くも未だ「男子教育に比べれば不急」と言われた時代。幼な顔の残る女子が親元を離れ、県外にまで学びの場を求めたことは予想を超えた出来事であった。これら女子の中から、その後の東海地域の女子教育を支えるリーダーも生まれていることに注目したい。

〔2〕 京都で学び各界で活躍

京都の女学校とは、京都府が明治 5 年、わが国初の女学校として開校した「京都新英学校及び女紅場」のことであり、現在の京都府立鴨沂高等学校の前身である。「女紅」とは、女性が生活を全うするための技術（家事、裁縫、手芸など）のことで、女紅場とは、その教育の場（学校）を意味している。従って、同校は教養豊かな女性の育成が目的で、明治 30 年頃は本科、補習科、裁縫専修科などからなる総合学科であった。ちなみに開講科目は、修身・国語・歴史・地理・数学・理科・家事・裁縫・習字・図画・音楽・体操・漢文・英語、手芸などである。

明治 10 年から 40 年の間にこの女学校で学んだ岐阜県の出身者には、岐阜市や西濃地方の者が多く、寄宿舎や下宿生活をしていた。明治 24 年発行の『鴨沂会誌』によれば、必要経費は寄宿料 3 円 30 銭など年間約 66 円とあるから、経済的にも恵まれた環境の子女たちであったといえよう。

彼女たちの卒業後の消息は、今日容易に把握できないが、活躍の様態に違いはあっても、女学校で修得した力は遺憾なく発揮されたものと思われる。幾人かを具体的に挙げる。

◇白川 幸（琴水）

安政 3（1856）年、飛騨大野郡下岡本村（現、高山市岡本町）の願生寺に生まれる。京都で学び、漢詩集『琴水小稿』などを出版し、中国にもその名が知れ渡る。同校の準一等授業補として、明治 10 年 3 月 16 日から同 13 年 12 月 25 日まで在職（京都府立第一高等女学校 創立第 35 周年記念誌）。その後、24 歳で名古屋の実業家と結婚し、一男一女をもうける

が34歳で死去。昭和の歌人として活躍した青木穠子は遺児である。その他の著書として「本朝形史列伝」がある。(平成24年10月21日「岐阜新聞」)

◇青木種緒

厚見郡岐阜町(現、岐阜市)の医師青木雄哉(注1)の息女。明治28年本科卒業。卒業後2年で病死したが、遺作の書画は品格が高く非凡である。当時の新聞によれば、青木父娘は同郷の後輩4人の入学に際し、諸事にわたって面倒をみていたという。(明治28年4月24日「岐阜日日新聞」より)

(注1) 青木雄哉(ゆうさい)

「岐阜医家姓名御用掛り」の「岐阜文化7(1810)庚午年」に名前が並ぶ医師。雄哉は1861(万延2)年から天然痘予防などに尽くした緒方洪庵に学び、さらに大垣の医師で植物学者としても名をはせた飯沼慾齋に師事して、岐阜で医師として活躍する。「岐阜大学医学部50年史附属病院120年史」の中でも、岐阜大学医学部の設立にかかわった一人として雄哉の名を挙げて紹介している。

(平成23年11月13日「岐阜新聞創刊130年『悠遊ぎふ』」)

◇戸田絹江

本巣郡文殊村(現、本巣市文殊)の大亀寺に生まれる。明治29年本科卒業。寺を継ぎながら村内の子女に作法、茶道などを教え、地域婦人会のリーダーとして活躍。

◇丸山とし(渡辺 敏)

各務郡岩田村(現、岐阜市岩田)の医師丸山守一郎の息女。明治32年に本科を卒業後、東京女子師範学校に進む。その後、東京裁縫女学校(現、東京家政大学)創立者の長男(第二代学長渡辺滋)と結婚。同裁縫女学校で作法や習字などを教えながら6人の子どもを育てた。

◇志知文子(西川文子)

安八郡南杭瀬村外野(現、大垣市外野)の地主、志知伊左衛門の息女。明治32年本科卒業、同35年国文科卒業。大垣高等女学校で約1年間教えた後、上京して平民社の活動に参加。さらに普選運動や婦人解放運動に従事し、「新真婦人会」を結成。

【3】東京で学び女学校を創立

西の「京都府女学校」に対し、東の「東京裁縫女学校」で学んだ子女もいる。この学校は、明治14(1881)年、渡辺辰五郎が開設した私塾「和洋伝習所」が明治25年に改称、発展したもので、現在の「東京家政大学」の前身である。

明治時代に同校へ進学した岐阜県出身者のうち、名簿などで確認できた子女は総数36名を数える。地域的にみると、揖斐郡が8名、次いで岐阜市と大垣市が多く、飛騨地方出身者も数名おり、出身地については、京都の女学校とはやや異なった傾向を見せている。卒業生は多方面で活躍しているが、帰郷して学校を創立した者が比較的多いことが知られている。東海地域に限定しても次の6名が学校を創立し、教育の振興に寄与している。

◇新名百刀（にいな・もと）

明治5年生まれ。安八郡室村（現、大垣市）出身。同25年同校卒業。同35年、小田原市で裁縫・編物伝習所を開校。同市の「新名学園旭丘高等学校」に発展。

◇富田かね

明治6年生まれ。美濃大野郡傍島村（現、岐阜県揖斐郡揖斐川町）出身。卒業年は不詳。同39年に「富田女学校」（現、富田高等学校）を岐阜市に開校。

◇佐々木とよ

明治6年生まれ。厚見郡今泉村（現、岐阜市）出身。同32年同校卒業。翌年、岐阜裁縫伝習所を開校し、同36年に「佐々木裁縫女学校」（現、鶯谷高等学校）を岐阜市に開校。

◇椛山正式・椛山今子

正式は明治12年生まれ。武儀郡上有知村（現、美濃市）出身。小学校教員、「県教育界誌」編集員を経て上京。男性であるため特例として同校への入学を許可され、同38年卒業。その後、同窓の中村今子（加茂郡加治田村出身）と結婚。相携えて帰郷し、同38年に「名古屋裁縫女学校」（現、椛山女学園）を名古屋市に開校。

◇片桐龍子

明治23年生まれ。愛知県北設楽郡東栄町出身。同44年同校卒業。大正7年に「岐阜裁縫女学校」（現、済美女子高等学校）を岐阜市に開校。

東京裁縫女学校が、このように学校創立者を次々と輩出したのはなぜであろうか。多分に時代の動向や社会のニーズなど諸要件とのかかわりもあつてのことであろうが、自ら創立に立ち向かい実行した人材の育成は、一つに東京裁縫女学校創立者、渡辺辰五郎の教育理念と情熱によると言つてよい。渡辺は裁縫の目的を「技術を身に付けさせて女性の経済的自立を図るといふような短絡的なものではなく、創造する能力、応用し発展させ得る力の開発にある」（『渡辺辰五郎と今日の教育』）とし、裁縫を通して創造力や発展力に富むスケールの大きな人間性の育成を目指した。そのため、カリキュラムの系統性を重視し、教材の工夫、教授法の革新などに精力を傾注した。掛け図による一斉指導、ひな形、そで形、褌形、半紙を活用しての裁刀実験など、次々と試みられる新しい指導法に生徒たちは目を輝かせ、旺盛な意欲を支えに自己の能力を十全に発揮して学んだことであろう。そうしてこの学びを通して、学校教育のもつ役割と使命の大きさに気づいていったに違いない。

東京にまで出向いた若き意欲とエネルギーに応え、それを大きく育て上げた東京裁縫女学校の教育が以降、各地における女子中等教育の萌芽、充実に寄与したことは意義深い。

【おわりに】

他の県に先がけて始まった岐阜県の女子中等教育は、惜しくもわずか8年でその歩みを止め廃絶となった。女子教育の進展を願う人々、向学心に燃える女子にとっては、将来の大きな志と期待が閉ざされ、落胆も甚だしいものがあつたであろう。

しかし、こうした状況の中にあっても、子女の中には学習への意欲衰えることなく、学ぶ場を県外に求め、意志を貫いた者がいた。当時の県議会における峯視学官の報告にあつたように、東に西にその人数は少なくなかった。子女が学んだ学校の卒業生名簿の中から、それら一人一人の確認作業をすすめていると、遠隔の地において困難を乗り越え、屈することなく学んだであろう子女の姿が思い浮かび、同時に不況や災害（水害と濃尾大地震）による窮乏の中で経済的負担を覚悟して支援した父母の勇氣ある選択に驚くのである。

岐阜県的女子中等教育は明治33年、再開するが、女学校不在時代、故郷を離れて学んだ子女の情熱と成長がその萌芽となっているようにも思われる。子女らは実によく学び、その成果を確かなものとして社会に示している。ただ残念なことは、消息が途切れるなど調査に限界があり、資料も乏しいことなどから多くの業績が埋没してしまっていることである。

地方紙の小さな記事は、一つの美談の事実を通して、岐阜県の女学校不在の時代を報知したかったのであろうか。これらの調査研究の成果は、教育史に触れる講義の中で活用したい。

参考文献

- ・岐阜県女性史編集委員会『まん真ん中の女たち』岐阜県 2000年
- ・『岐阜県史』通史編 岐阜県 1967-72
- ・『岐阜県議会史』1 岐阜県議会 1980
- ・『岐阜県議会議事録・議事速記録』
- ・『岐阜県教育史』史料編近代 岐阜県教育委員会 1998-99
- ・岐阜県教育会編『岐阜県五十年史』（復刻）第一書房 1981
- ・戸部芳文『岐阜県教育発達史』戸部芳文 1991
- ・深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房 1966
- ・坂本清泉・坂本智恵子『近代女子教育の成立と女紅場』あゆみ出版 1983
- ・小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房 2001
- ・日本女子大学女子教育研究所『明治の女子教育』国土社 1967年
- ・世界教育史研究会『世界教育史大系34』講談社 昭和56年
- ・橘木俊詔『女性と学歴』勁草書房 2011
- ・校祖生誕150年記念誌委員会『渡辺辰五郎と今日の教育』学校法人渡辺学園
1994年10月20日
- ・京都府立第一高等女学校『創立第三十五年記念誌』京都府立第一高等女学校
明治40年10月15日
- ・『学園のあゆみ』鶯谷女子高等学校 1983
- ・『六十年史 富田女子高等学校』富田女子高等学校 1969